

日本音楽学会第66回全国大会プログラム (青山学院大学 青山キャンパス, 2015年)

大会 第1日 11月14日 (土)

09:00~

受付 (17号館5階フロア)

09:30-09:35

開会の辞 (17512教室)

					(開会の辞)
	17408教室	17506教室	17511教室	17606教室	17512教室
	セッションA 司会: 沼野雄司	セッションB 司会: 広瀬大介	セッションC 司会: 朝山奈津子	セッションD 司会: 吉川文	パネル 1
09:40-10:20	A-1 埜岡悠希 アレグロサンダー・コレクティヴィズムへ——1970年代の高橋悠治の「政治化」の意味	B-1 館里里沙 ワーグナーの楽劇《ニーベルングの指環》上演における身振り・劇的身振り——1976年以降の(ラインの黄金)演出を中心に	C-1 榎山陽子 イギリスにおける連声の技法の容認度の変化——ヘンデル《メサイア》の扱いを巡って	D-1 津上英輔 音楽理論から音楽美学へ——メーのブトレイオス技法論解釈と古代音楽像	9:40-11:50 音楽と文化資源としての音環境 コーディネーター: 鳥越けい子 パネリスト: 上野正章 小西潤子 渡辺 裕
10:25-11:05	A-2 林 萌子 アレグロサンダー・ゲル《都野と続鼓 Kantan and Damask Drum》における「日本のなるもの」	B-2 佐野旭司 ワーグナーの「発展的変奏」に関する一考察——その手法の変遷を中心に	C-2 中村 良 ルイ14世治世下の王立音楽アカデミーで上演された舞曲の統計的調査——踊られるための舞曲の実態と、既存の言説との比較	D-2 園田順子・津崎実・澤井賢一 聴覚モデル(AIM)による楽曲分析の可能性——H. シュッツ(私はあなたさえいけば)(SWV280)を例に	
11:10-11:50	A-3 平野貴俊 1970年代後半のラジオ・フランスにおける芸術音楽チャンネル「フランス・ミュージック」の改革	B-3 山岸佳愛 「モーツァルトとアロン」の音列分割法——テキストとの関連をめぐって	C-3 三島 郁 18世紀の「通奏低音」用法——数字付きバスによる鍵盤上の作曲訓練	D-3 中巻寛子 カルダーラのオペラ《不変の愛は策略に打ち勝つ》——その知られざる1707年と1710年の上演について	

11:50-12:45 昼休み (注文した弁当は5階フロアの受付まで)

	セッションE 司会: 向井大策	セッションF 司会: 近藤静乃	セッションG 司会: 西川尚生	セッションH 司会: 栗原詩子	パネル 2
12:45-13:25	E-1 藤村晶子 Neue Musik Berlin 1930——社会と切り結ぶ音楽祭	F-1 大角欣矢 (諸事情によりキャンセル)	G-1 福地勝美 「教会音楽作曲家としてのモーツァルトの評価は、大部分、7つのカンタータに基づいている」——19世紀に登場したドイツ語カンタータ(KV3 Anh.124-130)をめぐって	H-1 木内麻理子 H. ベルリオーズの《レクイエム》(1837)におけるポエティックス——《レクイエムとキリエ》を例に	12:50-15:25 グイド・ダレッツォ、その虚像と実像 コーディネーター: 那須輝彦 パネリスト: 皆川達夫 宮崎晴代 石川陽一 吉川文 平井真希子
13:30-14:10	E-2 中村 仁 ヘンデルの《室内音楽 Kammermusik》——20世紀前半のドイツ語圏における「室内」Kammer-音楽の射程	F-2 越懸澤麻衣 「セノオ楽譜」の戦略——ベートーヴェン作品を例に	G-2 安田和信 ジャンルを超越する——W. A. モーツァルトのシンフォニー短調K.550の主要主題について	H-2 村井幸輝郎 Ch.-V. アルカンの合奏(的)作品中のある音列の使用に関して——ユダヤのアドヴァン・ラバー技法と西欧の和声的短音階としての二面性	
14:15-14:55	E-3 白井史人 記録映画『白い洪水』(1940)におけるハンス・アイスターの音楽——「自然」描写の慣習批判としての12音技法	F-3 周東美村 童謡と1920年代のメディア変容——「読む」と「歌う」ことの意味をめぐって	G-3 小石かつら 転換点としての《エロイカ》——演奏会史から見たその意義について	H-3 上田泰史 パリ国立音楽院ピアノ科における定期試験レパートリー再構築の試みとその変遷に関する考察(1850~89年)	
15:00-15:40	E-4 池原 舞 ストラヴィンスキーの作曲行為——五線ローラーの使用と紙片の切り貼りの意義	F-4 梶野絵奈 大正期の通信教育受講者の音楽らら——大日本家庭音楽会が出版した雑誌『家庭音楽』の全容	G-4 伊藤 綾 ベートーヴェンの連作歌曲《遙かなる恋人に》Op. 98における視覚的調性と聴覚的調性の不一致	H-4 神保夏子 マルグリット・ロンとラヴェル——「作曲家の意図への忠実」概念の普及をめぐる演奏文化史的考察	

15:50-17:20 総会 (17512教室)

17:30-18:40

ミニ・レクチャー・コンサート(本部礼拝堂): 金澤正剛・鳥越けい子・伊藤園子・大学聖歌隊 ほか

19:00-21:00

懇親会(アイビーホール学生会館)

大会 第2日 11月15日 (日)

	17408教室	17410教室	17511教室	17510教室	17512教室
	セッションI 司会: 伊東信宏	セッションJ 司会: 福田 弥	セッションK 司会: 水野みか子	パネル 3	パネル 4
10:00-10:40	I-1 小日向英俊 沖縄インド人コミュニティの音楽	J-1 三島 理 R. シューマンとブラームスの諸作品に見られる教則的關係——模倣を使用する楽曲の模倣の音程とその配列に着目して	K-1 大高誠二 1880年台のフレーズ論の理論的成果——フレーズ、拍節、そして韻律をめぐって	10:00-12:00 音楽学とアカデミック・リテラシー——まず学部生のレポート指導から考える コーディネーター: 宮澤淳一 パネリスト: 佐藤 望 沼口 隆 ディスカッサント: 朝山奈津子	10:00-12:00 1980年以降の現代音楽史 コーディネーター: 沼野雄司 パネリスト: 長木誠司 片山社秀
10:45-11:25	I-2 松本奈穂子 オスマン朝末期の演劇ポスターに見られる音楽活動	J-2 瀬良万葉 ローベルト・シューマン《楽園とベリ》再考——同時期に成立した他作品からの深化として	K-2 今野哲也 「クリスタルと音」の概念およびそれを再考した分析の有効性について——ドビュッシー《前奏曲集 第II集》を中心に		
11:30-12:10	I-3 川崎瑞穂 浅草寺「白鷺の舞」の構造人類学的研究——舞のヴァリエーションにみる分類体系の影響	J-3 長井進之介 F. リストの歌曲再評価の試み——「管弦楽伴奏歌曲」の先駆者としてのリスト	K-3 中村 真 民謡の「再作曲」——レオシュ・ヤナーチェクの初期の合唱作品における理念		
12:15-12:55	I-4 竹内茂夫 バビロン捕囚の帰還者リストに現れる「女性歌手たち」(エズラ2: 65, ネヘミヤ 7: 67)とは何者か?	J-4 竹下可奈子 ムースルグスキの歌曲に見られるロシア語イントネーション模倣の諸相と変遷	K-4 仲辻真帆 渡鏡子の歌曲作品研究——日本語の扱いを中心に		

12:55-13:55 昼休み (注文した弁当は5階フロアの受付まで)

	セッションL 司会: 増田 聡	セッションM 司会: 前川陽都	セッションN 司会: 村田千尋	セッションO 司会: 磯山 雅	パネル 5
13:55-14:35	L-1 大鷹 徹 1960年代日本におけるジャズ評論の争点——教養が運動か	M-1 田邊健太郎 (諸事情によりキャンセル)	N-1 黒川照美 「古楽対モダン」という問題系の再検討——指揮者とその古楽アプローチに対するモダン・オーケストラの団員の視点から	O-1 富田 庸 バッハの作曲過程と演奏へのヒントを八分音符の連符から読み解く	14:00-16:00 「近代フランス音楽」のカノン形成——なぜ、いかに、はたして「フォーレ・ドビュッシー - ラヴェル」なのか コーディネーター: 友利 修 パネリスト: 成田麗奈 神保夏子 平野貴俊
14:40-15:20	L-2 川本聡胤 ザ・ローリング・ストーンズの『ベガーズ・バンケット』(1968)における折衷性——「進歩的」要素と「ブルース的」要素の融合	M-2 小寺未知留 1970年代米国の音楽研究における批評概念再考	N-2 山口真季子 ヘルマン・シュルヘンによる「シューベルト解釈」——交響曲短調D759「未完成」第一章を中心に	O-2 村田圭代 J. S. バッハのヴァイマル時代における他者作品の受容——J. G. ヴァルターとの対位法知識共有の可能性に着目して	
15:25-16:05	L-3 柴田康太郎 1930年代のトニー音楽と東宝音楽部——伊藤昇と早坂文雄を中心に	M-3 吉野秀幸 D. J. エリオットの「musicing」——音楽教育哲学における「行為」の視点	N-3 直江学美 日本声楽界におけるアドルフ・サルコリの影響に関する一考察——サルコリの演奏活動を調査して	O-3 江端伸昭 (諸事情によりキャンセル)	
16:10-16:50	L-4 高久 暁 コレクション・アレクサンデル・チェレンコフ再考——一次資料類から看取される出版の実態	M-4 西田 敏子 アメリカにおけるセンカー分析理論の100年——方法論の変遷	N-4 Hermann Gottschewski Allerhand Lustiges aus dem Tokio Gesang-Verein——1880年代の東京合唱協会から見た在東京ドイツ人の男性社会生活	O-4 田中伸明 フランス・ペンダ(フルート協奏曲)の成立に関する考察——ペルリント・カールスルーエの両宮廷における音楽受容のあり方を中心として	

16:55-17:00 閉会の辞 (17510教室)

(閉会の辞)